



No Book No Life

No.2 / 2021年5月

全国書店員が選んだ いちばん！ 売りたい本

「本屋大賞」

今年の4月14日に本屋大賞の結果発表が行われました。新型コロナウイルス感染対策のためメディアのみが招待されYouTubeでライブ配信されました。2021年本屋大賞受賞作は、町田その子著『52ヘルツのクジラたち』に決まりました！この本は「読書メーター OF THE YEAR」1位、「ダ・ヴィンチ BOOK OF THE YEAR」4位という実績もあり、人気のある小説です。また、本校の図書室には『52ヘルツのクジラたち』含めた歴代本屋大賞1位の文庫が置いてあります。是非図書室に来て読んでください！



《本屋大賞って？》

「本屋大賞」は、新刊書の書店（オンライン書店含む）で働く書店員の投票で決めるものです。過去一年の間、書店員自身が読んで「面白かった」、「お客様にも薦めたい」、「自分の店で売りたい」と思った本を選び投票します。

《本屋大賞ってどうやってできたの？》

本屋大賞が設立されたのは2004年のことでした。当時は本の売り上げが伸びず、書店の数も減っていく中、出版される本の数だけが増えていき、出版社業界は不況におちいっていました。ついには本を売り出す大きな機会である2002年下半期の直木賞では「受賞作なし」と発表されてしまいました。この出版不況の中、「本の雑誌社」の杉江由次がこのことに憤り、出版社の営業として自分が普段接する書店員の声を拾い上げるために「本屋大賞」の設立を思いついたのです。

《どんな本がノミネートされるの？》

「本屋大賞」の特筆すべき点は、書店員が主体であることです。従来のように編集者を介することがないので、実行委員会によるいわゆる「根回し」や「すりあわせ」がないのです。つまり、多くの人に面白さが伝わり、共感を呼ぶような作品がノミネートされやすいです。

《歴代「本屋大賞」1位入賞作品》

2004	『博士の愛した数式』	小川洋子	2013	『海賊と呼ばれた男』	百田尚樹
2005	『夜のピクニック』	恩田陸	2014	『村上海賊の娘』	和田竜
2006	『東京タワー～オカンとボクと、時々、オトン～』	リリー・フランキー	2015	『鹿の王』	上橋菜穂子
			2016	『羊と鋼の森』	宮下奈都
2007	『一瞬の風になれ』	佐藤多佳子	2017	『蜂蜜と遠雷』	恩田陸
2008	『ゴールデンランバー』	伊坂幸太郎	2018	『かがみの孤城』	辻村深月
2009	『告白』	湊かなえ	2019	『そして、バトンは渡された』	瀬尾まいこ
2010	『天地明察』	冲方丁	2020	『流浪の月』	凧良ゆう
2011	『謎解きはディナーのあとで』	東川篤哉	2021	『52 ヘルツのクジラたち』	野田そのこ
2012	『舟を編む』	三浦しをん			

※この作品はすべて高高図書室で読めます！

AKIRA の 1 冊

『ザリガニの鳴くところ』ディーリア・オーエンズ 著／友廣順 訳（早川書房）

本屋大賞の受賞作は日本の小説ばかりではない。2021 年翻訳部門の大賞がこれだ。そんなことなどまったく知らずに私は読んだ。装丁が良い。

個人的にはエンタメ色が濃いのと思っている本屋大賞受賞作の中で、この小説の持つ奥行きは出色と言える。とある湿地に住む、社会的にも経済的にも最下層（この言葉あまり使いたくないのだが…）に属するような 1 人の少女を主人公とするアメリカの小説だ。

殺人事件が起こる。それを起点とすれば確かにミステリーとして読める。しかしそれだけではない。全編を読み通せば、これは見事に 1 人の〈女の一生〉であるし、湿地に生息する様々な生き物たちとの共生という観点に立てば、環境問題を提起している社会派小説としても読める。さらには格差、差別、ジェンダー、恋愛と、様々なアプローチに堪えうる作品。とかくテーマを盛り込みすぎると作品としての焦点がぼやけるものだが、この作品は翻訳がうまいのか読みやすく、とっ散らかした感じがしない。こういう小説はありそうでなかった。高高の図書館に入っています。（国語科 渡辺彰）

